
城崎明音の推理

高城西獅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

城崎明音の推理

【Nコード】

N3827Z

【作者名】

高城西獅

【あらすじ】

投稿の速度は遅いかもかもしれませんが、読んでいただけると嬉しいです

プロローグ（１）

彼女に出会ったのは、秋の日の夕焼けが恐ろしく綺麗な日だった。界限の家々や木々や電柱はその全てが金色に染まり、正直、この世の終わりで来たのかというような美しさだった。

その時の私は、ちょっとした飲み会があつて、その会場へ行くためのバス停へ向かうところだったのだが、それで思わず立ち止ってしまった。バスの時間は気にかかったが、産まれてからの21年、こんな夕方の風景は一度も見たことがなかったので、しばし呆然とした時間を過ごした。

長く眺めていると、もうひとつ不思議なことが分かった。

西の空は鮮やかな金色なのだが、東の方向へ目を移していくにつれ、空は徐々に暗いトーンへと変貌し、鮮やかな紫色なのである。

金色の空と紫の空が同じ時間に、同じ空に同居している。それはちょっと形容し難い、神秘的な空間だった。

私は安心して、その空を見上げた。

その時だった。急にこの空間に似つかわしくない、犬のけたたましい泣き声が聞こえてきた。

私は折角の貴重な時間を邪魔されたことに内心で苛立ちながら、その方向に目を移した。

住宅街の向こうの細い道路から、ベージュのダッフルコートに身を包んだ、おそらく私と然程年齢は変わらないだろうと思われる一人の女性が、甚だしく狼狽してこちらへ走ってくるのが見えた。

そのすぐ後ろを何か小さな動物が走っている。先ほどの泣き声は、どうやらこの犬らしい。

最近流行のトイプードルだろうか。首輪がされている。リードを握っているのは、無論、先を走っている女性である。何事か分らないのだが、犬は後ろへ向かって懸命に吠え立て、リードを握る女性は一心不乱にこちらへ走ってくる。

しかし、すぐにその理由は分かった。

追われているのである。最初、それに気付いた時には、私は嘔き出しそうになった。彼女たちを追っているのは、猫だった。

白と茶色の縞模様の猫で、「シャツ」と物凄い形相で、何度かトイプードルに攻撃を仕掛けながら、またすぐに一定の距離をとって、執拗に追い立てている。

猫に追われている犬、そして、その犬のリードを握って逃げ惑う女性。

先ほどまで見ていた優美で幻想的な空と、少しも釣り合わない滑稽な状況に、私はお腹を抱えて笑い出しそうになるのを必死に堪えた。

でも、追われている女性と犬の表情は真面目そのものである。女性が私の姿を見留めて

「お願い、たすけてー」

と、悲鳴に似た声を上げた。

可笑しくて、しばらく見ておこうかと思ったのだが、それでさすがに可哀想になって、手伝ってあげることにした。

私は、彼女たちが私のそばまで逃げてきたのを見計らって、猫に蹴りを食らわせた。

猫は後ろざまに飛び跳ねて、その私の攻撃をかわす。

ここまでは、想定内。異変はその後に起こった。

一瞬ひるんだ猫に、これぞ好機と思ったものか、トイプードルが猫に攻撃を仕掛けたのである。猫はすばやく攻撃をかわし、私の足の周りを旋回した。それを追うトイプードル。そのおかげで、あっという間に私の足は、トイプードルのリードで縛られてしまった。

私は足の自由が利かなくなつて、前につんのめってこけそうになった。その時、予想もしていなかった、最後の一撃が来た。

追いつきそうになって、猫にいいよ噛み付こうと口を開いたトイプードルの牙が、すんでのところで猫にかわされ、その牙が私の足に喰らいついたのである。

「痛ってー!!」

大声を上げて、ついに私はすっ転んでしまった。その拍子に、猫はサツと近くの塀に飛び乗り、あっという間にその向こうへと姿を消した。トイプードルはなおも興奮して、ワンワンと激しくそちらを吠え立てている。

私はかたわらでわめき散らかすトイプードルを、思い切り殴りつけたい衝動に駆られた。だが、自分の犬でもないし、飼い主がそばにいるのでそうも行かない。

すると、当の飼い主がひどく狼狽した様子で

「ごめんなさい、大丈夫ですかあ？」

心配そうな声を上げ、私の傍らにしゃがみこんできた。

「あ、ああ、大丈夫だよ」

私は笑顔で言った。先ほどから薄々気付いていたのだが、その女性はかなり私の好みのタイプだった。無理に格好をつけて、気安い声を出してみた。

しかし、噛まれた部分は意外にズキズキとしている。

「ちょっと、ごめんなさい」

彼女はそう言うなり、私の噛まれた部分のズボンを捲くり上げた。靴下に血がにじんでいた。彼女はその靴下をも下ろした。

内心、私はビックリした。この女性、どうやらかなり大胆な性格らしい。こんな状況になったとは言え、なかなか初対面の異性にここまで堂々とした対応はとれない。

しかし、彼女はそんな私の内心の動揺に気付く風もなく

「たいへん！」

と、大声で叫んで、私を見た。

その上目遣いが私をドキリとさせる。細面の白い顔が、心配そうに曇っている。おかげで痛みはまるでマヒしてしまった。

傷に目をやると、確かに、犬歯の後なのか、綺麗に二つ穴が開いていて血が出ていた。血は多少シヨックだったが、私の見たところ、そう気にするようなものでもない。

「大丈夫だから、とりあえずリードをほどいてくれる?」

私がそう言うと、彼女は小さく「あっ」と叫んで

「ごめんなさい」

と、胸の辺りまで垂れ下がった髪を揺らしながら、一旦、首輪からリードを外し、素早くリードだけを私の足からするりと抜き取ってくれた。手際の良さとは裏腹に、表情は恥ずかしそうにモジモジとしている。それがまた可愛い。

こういう時、同じ年頃の男なら、キツカケとして使うのだろうが、私はその点まるでダメである。

「ありがとう」

と、お礼を言つて立ち上がると、膝とお尻の汚れをはたいて、彼女に背を向け、バス停へと歩き始めた。

すると、意外なことが起きた。

彼女が私の前に回りこんで、「ダメです」と、手を広げたのである。

「え?何が...??」

「だって、怪我してるじゃないですか!病院へ行きましょう。私、付き添いますから」

「いや、大した事ないよ。普通に歩けるし」

「ダメですって、血も出てるし」

「これくらい平気だよ。あとでカットバンでも貼っておくから」

「えー、でも何かの菌が入って腫れたりしたら...」

彼女が困ったような表情で私を見つめた。

「あ、じゃあ、せめてウチへ来てください」

何か思いついたように、彼女が続ける。

「とりあえず、消毒だけでもさせてください。カットバンもありますから」

「うーん」

私は思案した。実はさっき血を見た時から、(ジーンズに血がついたら嫌だな?)と、貧乏たらしい悩みが頭をもたげていたので

ある。

結局、私は彼女の言葉に従うことにした。

飲み会に行くのはやめにした。

プロローグ（2）（前書き）

続きます。良かったら読んで下さい。

プロローグ(2)

案内されたのは、路地裏にある一軒の喫茶店だった。

思わず「あ！」と、声が出た。

彼女が耳聴くそれを聞きとめて

「来たことありますか？」

と、嬉しそうな笑顔で振り返った。

私に怪我を負わせた間抜けなトイプードルは、既に歩くことをやめ、彼女の胸に抱きかかえられている。あまり歩きたがらない犬のようだ。それとも、さっきの猫との戦いで疲労困憊したものだろうか。

「ああ、以前に何度か」

私は曖昧に答えた。

「そうなんですか！。どうでした？」

「ああ…。確か、コーヒーとホットケーキが美味しかったよね…」

数年前、高校時代の思い出が蘇ってきた。この店は、当時付き合ってた女性に何度か連れられて来られた喫茶店だ。

今はもう会うことのかなわないその人との記憶が、ふつと昨日の出来事のように去来する。あれ以来、ここには来た事がない。妙な縁だ。

彼女は店に入らず、その脇の路地を裏手に回って行った。途中潜り戸があり、彼女はその奥へと入って行った。私もそれに続く。

潜り戸の向こうの店の裏部分は、店舗部分の瀟洒な佇まいに似合わず、こじんまりした和風の縁側になっていた。敷地には庭木がいくつも植えられていて、紅葉がちょうど鮮やかに赤く染まっている。四季ごとに、この縁側から季節の移ろいが見られるようになっていくのかも知れない。

彼女はその縁側の掃き出し窓を開け、私にそこへ座っておくように促して、アホ犬を抱えたまま廊下を奥へと走っていった。

私がお言葉に甘えて、そこにぼんやりと座していると、程なく彼女がアホ犬を救急箱に抱き代えて戻ってきた。

アホ犬は彼女の遥か後方で私の方を見て、「ワンワン」と泣き叫んでいる。

愛する主人が自分を置いて、見たこともない人間の方へ行つたことに嫉妬しているのだろう。ちょっといい気味だ。

そのアホ犬がどうしたものかと、その辺をウロウロしている間に彼女の治療は終わった。

久しぶりのオキシドールが随分してみたが、この刺激が効いてるなあという気持になるのは、子供の頃から変わらぬ錯覚かもしれない。ひととおりの仕事が終わって、「そういえば」と彼女が口を開いた。

「もしかしたら、どこかへ行こうとなさってたんですか？」

「え、ああ……」

私は一瞬言葉に詰まったが、何だか急に可笑しくなって、たまらず吹き出してしまった。

「どうしたんですか？」

と、怪訝な表情の彼女。

「いや、別に散歩中だったただだよ」

私は本当のことは言わず、笑いを何とかおさめた。

さつき、私がバス停に行こうとするのを半ば強引に遮ったくせに、今頃そこに思いを廻らせた彼女の思考に、何とも言えない愉快な気分になった。

彼女は僅かの間、私の笑いにちよつと不満げな顔をしていたが、

「あ、私、名前を言ってなかったですよね？」

と、話題を切り替えた。

「私、きのさきあかね城崎明音っていいいます」

突然の自己紹介である。ちよつと意表を突かれたが、すぐにその名を脳味噌の皺へと刻み込んだ。

「ああ、僕は真島蒼介。ましまそうすけ…あの…なんて呼べばいいのか分からない

けど…明音ちゃんでもいい？」

「はい、好きに呼んで下さい」

屈託のない笑顔である。表情が豊かで、見ていて飽きが来ない。

「明音ちゃんはこの娘さんなの？」

「はい。この喫茶店は私のお母さんがやってるんです」

「へえー」

「私、ここで手伝いしてるんですけど。真島さん…って、最近も来られましたあ？」

「いや、来てたのは学生時代なんだ。もう2年くらいは来てないかなあ…」

私は思い出しながら言った。

「あ、そうなんですかー。さっき褒めてくださったホットケーキ、今は私が焼いてるんですよ。良かったらまた食べに来てくださいね」

「ああ、そうだね。是非食べに来るよ」

そこまで言って、私はさっきから気にかかっていた事を言葉にしようとして口を開いた。

「明音ちゃんって、何歳？お姉さんか、妹がない？」

「私、19です。姉も妹もいますけど…」

明音がそこまで言った時、庭先の方から

「あ、お客さん？」

と、別の声が聞こえてきた。

声の方向を見ると、セミロングのストレートヘアの一人の女子高生が庭先に立っていた。目が大きくて頬が少しがふつくらとした童顔なのだが、体型はモデルのようにスリムで、完全なる美少女だ。

「おかえり、ゆりあ」

明音が応えた。

「散歩中に、パンクがこの方に噛み付いちゃって、傷の消毒をさせてもらってたところ。真島蒼介さん」

紹介されて、軽く会釈をする私。

しかし、私の静かなる会釈は彼女の大声にかき消された。

「えー、パンクが噛み付いたのー？ほんとにー！？ヤバいんじゃないの？…あつ、どうも、すいませ〜ん！」

ゆりあと呼ばれた女子高生は一気に言っ、私にペコリと頭を下げた。

「普段はそんなことするコじゃないんですけど…」

尚も言い訳めいた事をぶつぶつと喋るゆりあ。

「いや、全然大したことはないんだけど…。あのワンちゃん、パンクっていう名前なんだね？」

私は二人の会話で、やっとあのアホ犬の名が「パンク」だと知った。飼い主が二人の美少女ということもあり、さすがに「アホ犬」とは呼べない。嫌々ではあったが「ワンちゃん」と言ってみた。

「そうなんです、トイプードルっていう種類の犬なんですけど…。可愛いでしょう？」

明音は当の可愛い犬が、私の足に噛み付いたことを既に忘れているのか、嬉しそうに言った。本当に悪意のまるでない、手放しの笑顔である。

「真島さんって…」

ゆりあが私の傍らで、縁側から家に上がるべく、靴を脱ぎながら言った。

「…色男ですね」

脈絡がない突然の発言に、ビックリした。

明音が慌てふためいたように、怒声をあげる。

「もう、何言ってるのあんた！」

私も何と言っていいものか、返事に詰まっ、ただ笑ってみた。最近の女子高生って、こうなのだろうか？驚いたが、「色男」と言われて悪い気はしない。それともからかわれているものか…。

「すいません！あ、まだ言ってなかったですよ？これ、私の妹でゆりあっ、いいいます」

弱りきった表情で明音が言った。本当にこの表情の変化は面白い。「いいじゃん、褒めてるんだから。ねえ？」

口元に含み笑いを浮かべて、ゆりあが私の方を見る。姉の判り易い反応と違い、こっちはどこまで本気なのか、ちよつと判断がつかない。

「えっと、ゆりあちゃんか妹って事は、お姉さんもいるんだね？」

私はこの話題から離れようと思って、さっきの話を持ち返した。

「あ、いますよ。もうすぐ帰ってくると思うんですけど」

「名前は城崎愛李あいりさん？」

「えー、何で知ってるんですか!？」

明音とゆりあが異口同音に、驚きの声を上げた。ゆりあは隣の部屋まで行きかけていたのだが、また戻ってきた。

「やっぱりそうか。高校時代の同級生なんだ。でも、同じクラスにはなかったことがなかったから、愛李さんは僕のことを知らないと思うけどね」

当時が思い出されてくる。

私が以前付き合っていた女性は高校の同級生で片瀬真那かたせまなといった。この長女の城崎愛李と真那は大親友で、真那がこの喫茶店に何度か私を誘って来たのもそのためだった。愛李は当時、自宅であるこの喫茶店でアルバイトしていて、私と真那が来ると必ずオーダーを取りに来てくれた。でも、仕事は真面目にこなすタイプのコのように、喫茶店内では真那ともほんの少し言葉を交わす程度だったから、私が愛李と話をしたことはたぶん一度も無かったと思う。

そして、ある日を境に私は真那と会えなくなり、むしろ愛李のいるこの喫茶店にも通うことは無くなった。

「さてと、血も止まったみたいだし、もう帰るね。治療、ありがとう」

私は思い出を振り払うように立ち上がった。

「あ!もう少し休んで行ったら、どうですか？」

「そうだよ、リンももうすぐ帰ってくるだろうし」

どうやら、愛李は妹たちに「リン」と呼ばれているようだ。

「愛李さんは、今は喫茶店の仕事はしてないの？」

「はい、近所の会社で事務の仕事やってるんです」

「へえー、そうか。じゃ、よろしく言っておいてね。たぶん彼女は僕のことを知らないと思うけど」

私は冗談めかしてそう言って、さっき通ってきた往来へ出る潜り戸の方へ歩いていった。

明音が慌てて、ついて来てくれた。ゆりあもさつき靴を脱いで縁側へ上がったばかりだいうのに、また靴を履いて降りてきた。

余りのサービスの良さに恐縮しながら、最後にもう一回「じゃあ」と言って、潜り戸に手を掛けた時、不意に潜り戸が向こう側から何者かによって開けられた。

「わっ！」

ビックリして、私が後ろへ飛び下がる。

すると、向こうから潜り戸を開けた女性も、戸から半ば顔を出して、驚いたように動きを止めた。目を大きく見開いて、中を窺っている。

見覚えのある漆黒のロングヘアだった。城崎愛李だ。

「あ……」

先に愛李が声を出した。明らかに私のことを覚えているような表情だった。

「……ひさしぶり」

本当に覚えているかどうかは分からないが、私は博打のつもりで言ってみた。

果たして彼女は覚えていたようだった。

「どうしたの……？ 久しぶり……」

もともと背が低くて童顔だった彼女だったが、それは当時と変わらないのに、今は綺麗な黒髪が複雑にカールしていて、チャコールのコートも相俟ってすごく大人びて見える。

後ろから、明音が全てを説明してくれた。それで最初は訳が分からないというような表情だった愛李も、納得したようだった。

「傷、大丈夫？」

「うん、平気。また喫茶店の方にも顔を出すよ」

「あ、うん。また来てください」

何となくお互いにぎごちないやりとりになる。それで私は早々にそこから辞去した。

また来るとは言ったものの、本当は来るつもりはなかった。

それでも数日後には何度もここへ足を運ぶようになるのだから、人生というのは分らない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3827z/>

城崎明音の推理

2011年12月16日22時56分発行